

印南町の防災



公益社団法人全国防災協会副会長

和歌山県印南町長 **日 裏 勝 己**

1. 印南町の概要について

印南町は、「印南かえる橋」がまちのシンボルで、「真妻わさび」「かつお節」発祥の地であります。人口8千人余りで、和歌山県のほぼ中央に位置し、広さ約113km²、73%を森林が占め、沿岸の平野部は、太平洋につながる紀伊水道に面し、海と山に囲まれ、豊かな自然に恵まれた歴史・伝統を誇る町です。沿岸沿いには国道42号線、山間部にかけて縦断する国道425号線がまちの幹線道路となり、また、市街地では、フルインター・サービスエリアを備えた近畿自動車道（高速道路）が縦断し、都市部との流通経路の動脈となっています。現在、高速道路の4車線化工事が進められており、2021年12月に開通となり、益々、人口交流、また経済産業の流通の促進が図られます。

これらの地勢を活かし、主力産業として、豆、スイカ、ミニトマト、花卉などの盛んな農業をはじめ、漁業、製造業等が営まれています。

また、歴史文化では有名な熊野九十九王子のひとつ、「切目王子」があります。古来、紀伊半島南部、熊野三山を参拝する熊野詣が盛んで「蟻の熊野詣」とも言われ、参詣者の守護が祈願された一群の神社であります。中でも五体王子社の一つとして、格式が高く中継遥拝所であったこの「切目王子」は、現



印南かえる橋

在もなお、檜皮葺きの社が静閑な佇まいを呈し、地域の守り神として鎮座しています。当社で後鳥羽上皇がしたためた和歌は、国宝「切目懐紙」として伝わっています。

こうしたまちへ、JRきのくに線の車窓から見える「印南かえる橋」が、町のシンボルとして皆様をお迎えしています。『素晴らしいまちです。』

2. 過去の地震・津波の発生状況

和歌山県では、県民に正しく伝え「正しく恐れる」ことを周知するとともに、防災・減災対策を着実に進めていくため、東海・東南海・南海3連動地震（M8.7）及び南海トラフ巨大地震（M9.1）の2つの津波浸水想定を、平成25年3月に公表しています。我が印南町では、3連動地震で最大7mの津波、南海トラフ巨大地震では最大15mの津波が想定されています。

南海トラフを震源とする巨大地震は、有史以前から100～150年に1回の割合で発生、日本列島の西半分が属するヨーロッパから連なるユーラシアプレートの下に、海側のフィリピン海プレートが年間3～5cm沈み込み、これが限界に達したとき、巨大地震が発生すると言われています。

印南町では、地震・津波被害の記録が、過去に3



印南漁港

度残されています。

はじめに、1707年（宝永4年）に起きた宝永地震（M8.6）・津波では、印南町での犠牲者は175名と記されています（一説には300名を超えたとも云われています）。

次の、147年後の1854年（嘉永7年）に起きた安政南海地震（M8.4）・津波では、犠牲者は0人と記録されています。先の津波で多くの犠牲者を出したことが、教訓となり文化として繋がったことが導きだした結果と推察します。

しかし、次の92年後の1946年（昭和21年）に起きた昭和南海地震（M8.0）・津波では、残念ながら、16名の犠牲者を出しています。

3. 過去の地震・津波から学ぶこと

1707年（宝永4年）に起きた宝永地震（M8.6）・津波は、最大級で、和歌山県域でも多くの被害があったにもかかわらず、被害の状況を伝える記録があまり残されていません。貴くも、印南町では、関係する正確な資料が残されており、特に大きな被害を受けた印南地域の菩提寺である印定寺の「津波溺死霊名合同位牌」と「高波溺死霊魂之墓」は、代表する資料として現在に伝わっています。これらは、溺死者の供養のため、13回忌を迎えた1719年（享保4年）に建立されたものであります。

【位牌と墓の記録】

黒の漆塗りで作られたこの合同位牌（高さが80.6cmある大きなもの）には、津波で犠牲になった162

名の戒名が記され、裏面には、地震・津波による悲惨な様子が、次のように記されています。

《現代語訳：位牌》

『ああ、時は宝永四年（1707年）十月初めの四日午の下刻（午後1時頃）であったか、大地震が数回あって山が崩れ地は砕け、男も女も正気を失ったところに未の上刻（午後2時頃）に山のような津波が凹凸となって打ち寄せて来て家財道具はたちまちに流されて行方知れずになった。前代未聞の出来事であった。誰も彼もが波にさらわれ漂い溺れ、哀れであった。親子兄弟はあつという間に離ればなれになり、流されて死んだ老若男女は一六二人、水上の泡と消えて和歌の浦に帰らぬ波のようにもう昔のこととなってしまったのだ。近くで見た人はもちろん、遠くで聞いた人もたいへん哀れに思った。享保四年（1719年）十月四日 十三年忌に当たる印定寺八代住職天誉忍然これを記す』と書かれています。

また、「高波溺死霊魂之墓」には、花崗岩製の墓碑（幅39.7cm、高さ基壇含め68.5cm、奥行38.7cm）で、正面に「高波溺死霊魂之墓」の文字が刻まれ、左側面には、地震・津波の災害の様子が次のように刻まれています。

《現代語訳：墓》

『時は宝永四年初冬四日午の下刻に大地震があって、山が崩れ地は裂け同未の上刻、凹凸とした津波が上がってきた。家財・牛馬は言うにおよばず、流死した老若男女の人々はおよそ百七十余人になった。近くで見た人はもちろん、遠くで聞いた人もた



合同位牌 裏書き



高波溺死霊魂之墓

いへん哀れに思った』と刻まれています。

また、背面には、江戸時代に藩の高札場が設置されていた人通りの多い場所と印定寺山門の2か所での津波の高さが記されていて、右側面には『享保四年十月初旬の四日にこれを建てる』と刻まれています。

この墓碑は溺死者の合同墓であり、悲惨な災害記録として現在も印定寺境内に残されています。

宝永地震・津波の大惨事の記録が、147年間語り継がれ、言い伝えられたことで、安政南海地震・津波による犠牲者を0人に導くことができました。まぎれもなく、「人々が素早く避難したから」と考えます。しかし、その92年後の昭和南海地震・津波は、先の地震より小さかったにもかかわらず、16名が犠牲となっています。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」との諺もあるように、地震や津波の様子を子々孫々と語り継いでいくことが、いかに大切で、難しいかを物語っています。

4. 中学校における津波研究のはじまり

南海トラフ巨大地震の津波浸水想定区域にある印南中学校では、津波研究班を結成し、「防災いなみっ子未来プロジェクト」として津波の学習を進めています。

東日本大震災の7年前の2004年（平成16年）に起きたスマトラ沖大地震に伴うインド洋大津波の衝撃がきっかけとなり、当時の状況をひもとく調査が始まります。体験された方への聞き取り、避難路の状況、高台まで逃げる時間の計測、フィールドワークを実施する等、年を重ね、受け継がれ、内容が深まってきました。その積み上げられた成果は、「日本学生科学賞」や「ぼうさい甲子園」において入賞、冊子『知っていますか？地震と津波』等として、地域住民の皆様に届けられています。

過去の辛い経験が、世代を超えて、子どもたちの手によって受け継がれています。

5. 新庁舎と避難路整備

印南町役場庁舎が、海拔30mの高台に新築、移転して、令和2年度で4年目を迎えています。

先の庁舎は、津波浸水区域（海拔3.9m）に位置し、建築後50年以上を経過し、耐震強度も不足していました。私が、町長就任以前から、庁舎の高台移転の議論・計画は進んでいましたが、浸水区域に住まれる住民の安全確保の要となる避難路の整備が遅れて



印南町役場 新庁舎

いました。

平成23年3月11日の東日本大震災の発生から、特に地震・津波に対する意識が強くなり、浸水区域に住む住民から、

「役場は高台移転で助かるが、我々はどうなるのだ！」

と、厳しいご指摘を受けました。時を同じくして、私の最初の町長選挙があり、私は、公約に

「新庁舎の建設は凍結し、避難路整備を優先的に進める」

としました。まずは、住民の命をつなぐ道を、と用地確保のできる場所については片っ端から避難路整備に取り組みました。現在、17本の避難路整備を終えたところでもあります。

この中でも、特に記憶に残っている避難路整備があります。以前から長く親交があり、お付き合いいただいていた方から「この土地を寄付するから、子ども達に避難路を作ってあげてほしい」との暖かい申し出をいただいたことでもあります。浸水区域にある印南小学校校舎のすぐ隣にあるその土地は、高台へ最短距離でつながる避難路を整備するには、絶好の場所でありました。

階段づくりの避難路が幅広で緩やかにでき上がりつつある中、あるシニア世代の女性から「町長さん、小学校の避難路ができるの、うれしいです。孫が3人小学校へ通っているので、とても安心です。」と、喜びの声を頂きました。完成まで地震・津波が起こらないようにと祈ったことを思い出します。



印南小学校 避難階段

当小学校から高台まで10分程度要していましたが、1分もあれば避難することができるようになり、子どもたちの命を守る道となりました。今では、2ヶ月に1度、全校生徒による避難訓練に活用されています。

用地提供して下さった方は、今は亡き人となりましたが、その志はずっと生き、引き継がれています。衷心から感謝と敬意を申し上げます。

6. 現在と今後の取り組みとして

〔高台移転について〕

避難路の整備は、着々と進んでいるものの、地震・津波の浸水区域に住まわれている住民の皆さんは、当区域から脱したことはありません。そこで、高台移転を進めるため行政ができることをと、新しくハード・ソフト両面において先行投資的に施策を推進すべく「未来投資基金」を創設し「印南町未来投資事業」を実施しています。

活用の一例として、津波の心配のない高台で、かつ、農地から宅地に転用可能なエリアに、民間による宅地化の推進をねらい、道路・排水溝・水道管を整備しています。工事中の箇所を含め、現在4ヶ所となります。今後、ますます高台への住宅建設が推進され、防災への取り組みになるとともに、延いては人口減少対策につながればと期待しています。

また、公共施設においても、いくつか浸水区域に所在し、町内小・中学校合わせ全8校中3校が、さらに、災害発生時の要となる社会福祉協議会施設、そして公民館や体育センターなど避難所として機能しなければならない施設もあります。いろいろな手立てを考え、できるだけ早く高台へ、福祉の拠点整

備等を進めていかなければなりません。

〔情報の収集と発信について〕

印南町では、災害時の情報収集や行方不明者の捜索にドローンを活用しようと、操縦できる職員の育成に努めています。現在30名の職員が操縦技能証明証を取得、ドローンは3機所有しています。将来的に、ドローンのサーチライトやスピーカー、サーモグラフィカメラ機能などを使用する情報部隊として、その機能と活用範囲の広がりを見込んで、より多くの職員が、日々の業務においても、効果的に活用できるよう進めていきたいと考えています。

7. 治水水利の切目川ダム

印南町の防災を語る上で、切目川ダムの建設を外すことはできません。長い歴史と思いの積み上げが切目川ダムにはあります。

印南町には、和歌山県が管理する切目川、印南川の2級河川が2本あり、この切目川流域では、昭和28年7月18日の大水害をはじめ、幾度となく洪水被害に見舞われました。被害をなくしたい、最小限にとどめたいという思いから、昭和42年9月、県に対して治水ダムの建設を要望し、以後、思いを届ける活動が続けられました。

ついに、昭和63年に事前調査に着手し、平成13年には切目川の洪水調節や印南町の水道水の確保等の目的を併せ持つ多目的ダムとして新規事業採択され、平成25年6月に定礎、平成27年3月には、切目川ダム竣工を迎えることができました。47年余に及ぶ壮大な取り組みであります。切目川の河川整備計画による下流域の河川改修が共に進められている今、随分と洪水や浸水被害が軽減されました。

現在、地球の温暖化が影響していると言われます



切目川ダム

が、台風の大型化や集中豪雨等により、全国各地で甚大な被害が発生しています。令和元年10月、東日本を襲った台風19号は記録的な大雨をもたらし、試験湛水中であった八ッ場ダムが一夜にして満水近くになったニュースには、果たす治水機能の役割に多くの人が関心を高めました。

ダム建設には、多くの犠牲（協力）と多額の費用、長い年月を必要としますが、洪水調整、利水、発電をはじめ、住民の生命財産を守る「安全・安心の要」として役立っていることを在り在りと再認識しました。

我が切目川ダムにおいても、印南町にとって、まぎれもなく百年の大計として成し遂げたものであり、改めて、先人達のご労苦に、そして、こよなく愛し、かけがえのない先祖伝来の故郷（ふるさと）を後にした関係地区の皆様へ、心より感謝を申し上げる次第です。

8. 結びに

今年も、各地で自然災害による甚大な被害が発生しています。何もかもが巨大化し、今までの常識では対応できなくなっています。自然の中で生かさせてもらうには、いかに早く危険を察知することができるか、危険を感じた時にどれだけ早く逃げることができるかが、重要と考えます。

昭和南海地震・津波の発生から今年で74年になります。今度いつ発生するかは、諸説があり、正確な予測は困難のようではありますが、研究者の調査で確認された過去の地震発生の数ある痕跡では、平安時代前期の887年（仁和3年）の地震から1946年（昭

和21年）に発生した昭和南海地震との間に、計10回発生していることが確実なものとされています。単純計算すれば118年間に1回発生していることとなります。そうすれば、おおよそ44年後に地震・津波が発生することになり、定かな数字ではないものの、日に日に近づいていることに間違いはありません。

神戸の「人と防災未来センター」でセンター長をされている河田恵昭先生のご講演を聞かせていただく機会がありました。その中で、和歌山県有田郡広川町での出来事：「稲むらの火」が、村民を高いところへ避難に導いた、このことが小学校の教科書に掲載され、世代を超えて教えていることが災害文化である、と述べられていました。

時に、我が町の印定寺に残された津波の記録も、同様、災害を予知し避難するという教訓が災害文化として育っていくことが、「犠牲者を一人も出さない、出させない」に繋がります。印南中学生が災害文化を育てる「防災いなみっ子未来プロジェクト」リーダーでもあり、今を生きる私たち大人も、子々孫々とそのことを伝える義務があります。

いま、コロナ禍の終息が見えない中、どのようにコロナと付き合うか、どのように「ウイズコロナ」で生活していくか、共に育てる防災の取り組みでもあります。私たち一人一人の意識が「自分（たち）の命は、自分（たち）で守る」行動に繋がります。まさしく防災の基本であります。人の命の代わりはございません。それぞれができることを根気よく続けることであると思います。そのことに徹していただきたいと願います。